



(題字は初代学長 山田守英氏)

第 155 号

平成26年 4 月 7 日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



「大学から見える風景 ～春の大雪山～」

(写真撮影：学生支援課)

平成25年度学位記授与式 学長告辞 …吉田 晃敏…… 2	一年を振り返って……………菅 彩花……10
医学科第36期生の卒業の日に……………大崎 能伸…… 5	新天地で出会ったもの……………白木 聡……11
看護学科第15期生の卒業にあたって	一年間を振り返って……………佐藤 光……11
……………望月 吉勝…… 6	一年間を振り返って……………里村真寿美……12
6年間を振り返って……………天野 太史…… 7	授業料未納による除籍について……………12
怒涛の6年間……………土田 美結…… 7	学生団体の「継続届」「設立届」の提出について ……12
卒業にあたって……………更科耕一郎…… 8	平成25年度 学位記授与式……………13
卒業にあたって……………伊藤早木衣…… 8	第2回 医学科白衣式……………14
卒業にあたって……………江口 由奈…… 9	各種保険について……………15
卒業を迎えて……………山田亜理沙…… 9	インフォメーション……………15
一年を振り返って……………川原 健司……10	教員の異動……………16



平成25年度学位記授与式 学長告辞

志ある若者達の新たな挑戦・ 旅立ちに心からの賛辞を

学 長 吉 田 晃 敏

(今回はご要望により、2014年3月25日に行われた学位記授与式 学長告辞を原文のまま掲載いたします)

本日、三つの学位記授与式(卒業式)を挙行し、卒業生、ご父母の皆さんと感動を共有出来ましたことを大変嬉しく思います。

始めに、医学科第三十六期生98名の皆さん、並びに看護学科第十五期生70名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんを今日まで育てて来られたご父母の皆様のご感慨も一入と思い、重ねてお祝いを申し上げます。学年担任を始め、教職に当たられた先生方そして学生諸君と接してきた職員の方々も本当にお疲れ様でした。

また、医学博士の学位を取得された18名の皆さん、そして看護学修士の学位を取得された13名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。皆さんの優れた研究業績と、指導教員と苦勞を共にした努力に対し、深く敬意を表します。努力で勝ち得たこの誇りある学位をステップに、より高いレベルの医療人へと皆さんが成長されることを期待しています。

さて、医学科第三十六期生の皆さんが本学の門をくぐったのは、今から6年前の2008年でした。皆さんは、私が本学の学長に就任して初めての入学生でした。この2008年は世界的な経済危機、いわゆるリーマンショックが発生した年でもあり、まさに全世界規模で暮らしへの不安が大きくなった年として長く記憶に残ると思います。

一方で、看護学科の皆さんが入学した2010年といえば、数々の困難を乗り越えて地球に帰還した、あの惑星探査機「はやぶさ」が大きな話題になった年で、皆さんもきっと大きな興奮と感動を味わったことと思います。

そして皆さんが本学で学んでいた2011年3月には、決して忘れることができない未曾有の大惨事、東日本大震災が発生しました。かつて経験したことのない大きな被害そして原発事故という大惨事に、私達は向き合うことになりました。

翌2012年ヨーロッパを中心に再び経済危機が再燃。そんな中、日本の山中伸弥教授がノーベル医学・生理学賞を受賞。

2013年に入り経済は再び上昇を始め、日本の先行きにも少し明るい兆しが見え始めてきました。6月には「富士山」が世界文化遺産に決定し、また、9月には2020年夏のオリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定しました。

こうして振り返ってみますと、皆さんの学生時代は日本がそして世界が大きく揺れ動いた、まさに激動の時代でした。特に、東日本大震災以降皆さんの多くは医学を学ぶ者として、自分に出来ることは一体何なのか、気持ちが大きく揺れ動いたことと思います。

そのような中で、皆さんは自分に課せられた使命を自覚し、真剣に勉学に向き合ってきたからこそこうして今日、無事学位を得て卒業の場を迎えることができたわけです。是非、胸を張って欲しいと思います。

ところで、地域格差は拡大し、医師は今も全道で不足しています。医療はどうあるべきか。国民の命を守るために「何をすべきなのか」……

今から41年前、この重い問いかけに対する一つの

答として誕生したのが、皆さんが学舎として選んだ、ここ旭川医科大学でした。私もまた当時旭川医科大学の一期生として、医療の在り方、命との向き合い方を考えながらこの大学の門をくぐりました。

以来41年。医師不足は解消したでしょうか？答えはノーです。医療格差は解消したでしょうか？答えはノーです。それどころか、問題はますます深刻となっています。今や道内でも至る所で医師が足りません。

一方、看護師不足もまた深刻です。国が看護体制を見直したことでニーズが一気に高まり、もはや慢性的とも言える看護師不足状態が全国で続いています。このような、正に深刻な「医療者不足」を前に、国は2008年、平成20年度から医師増員へと大きく舵を切りました。現在、医師は毎年4,000人程度増加しています。本年この3月からこの入学定員増員分が卒業しますので、医師数は更に増え、20年後の日本は今とは逆に世界でも一、二を争う医師大国になってしまうとも言われています。

医師不足と医師過剰。このような矛盾する情報を耳にする度に、皆さんはきっと自分は一体どうすればいいのかと、将来に対して漠とした不安を抱いているかも知れません。しかし、皆さん、「今」この瞬間の現実を見つめて下さい。医師が不足しているか過剰なのかは問題ではありません。問われるのは「志」です。私はいくら医師が増えても「志」ある医師が増えない限り、医療格差は解消しないと思っています。

私達の旭川医科大学は正にその「志」……、地域医療に貢献せんとする「志」ある医師や看護師を育てることを目的に生まれた大学です。そのために出来ることは何かを常に考えながら、私自身旭川医科大学の「改革」を進めて来ました。

皆さんの在学中に実現したことは、一つは「地域医療教育学講座」の新設です。北海道で最も必要な医師はどのような医師か？幅広い総合的な臨床能力

を有し、自分の得意分野を併せ持つ真の専門医、このような良医を継続的に育成することを目的に設置しました。

そして「ドクターヘリ」です。ヘリポートを本学敷地内に造りました。また、新たに立ち上げた「救命救急センター」が救命救急医・看護師養成へと繋がっています。

それから、「デイ・サージャリー室」を2室、病棟内に造りました。今年度も手術件数は7,000件の大台になる見込みです。本学のような600床規模の国立大学病院では飛び抜けた手術件数です。

さらには、3年前の10月に本学で初めて「生体肝移植手術」を行いました。先進医療を地域へ提供したい本学にとっては、大きな一歩です。

看護師に対しては、本院外で行われる研修費用の全額を大学が負担していますが、これは他の国立大学病院では例がありません。

また、女性スタッフが安心して出産、育児、介護にも取り組めるようにと「復職・子育て・介護支援センター」も設置しました。これらの施策の積み重ねにより、道内では初めて、東日本の国立大学病院としても初めて、働きやすい病院評価「ホスピレート」という、名誉ある認定を得て本院は高く評価されました。また、この「復職・子育て・介護支援センター」の取り組みが評価され、今年の1月に「北海道男女平等参画チャレンジ賞」を受賞し、高橋知事から表彰を受けました。

加えて、本学では医師の待遇改善にも取り組みました。病院で診療に従事する医師すなわち初期臨床研修医から教授に至るまで全職種を網羅して、給与のアップ、特別手当を支給しています。これは全国の国立大学でも初めてです。中でも初期臨床研修医に対する支給額は月額50万円となり、これは国立大学病院で最高額となります。

そして建物も整備しました。総合研究棟は新しくなり、講義実習棟も2年かけて全面的に改修しました。今後、図書館の大規模な増築と改修を致します。

これら数々の改革を通じて私が目指してきたものは「人材育成」でした。果たして目的は達成されたのでしょうか。今日皆さんがこの様に成長されたことは、先ずは大きな成果です。自分自身の努力を称え、どうか胸を張って新たな一步を踏み出してください。

私自身の志は遠隔医療という形で一つの実を結びました。まだインターネットも広く普及していなかった時代から、私を一貫して支え続けたものは、住んでいる場所に拘わらず、どこでも必要な時に必要な医療を受けられる環境を創りたいという思いでした。皆さんが入学した2008年には既にアジア（タイ、シンガポール）との遠隔医療を始めており、一昨年には中国との遠隔医療を始めました。総務大臣賞、文部科学大臣賞も頂きましたが、しかしながら私自身の志はまだ道半ばだと思っています。

皆さんの「志」は、何でしょうか？

医療人としての新たなステージを前に、もう一度自分自身の胸に「自らの志」を問いかけてください。

さあ！医療の最前線は皆さんが医師・看護職者としてデビューするその日を心待ちにしています。

私たちの旭川医科大学は、昨年、創立40周年という大きな節目を迎えました。そして今後は創立50周年という節目を一つの目標に、新しいスタートを切っております。

旭川医科大学に残ってくださる皆さんとはこれから新しいステージで、地域医療のため世界の医療のためそして高いレベルの研究を行うため、共に頑張っていきましょう。大学を去る皆さんとは将来更なる改革を成し遂げたこの母校で、共に働ける日が来ることを心から願っています。

志ある若者達の新たな挑戦・旅立ちに対して、心からの賛辞を込めて、ここに学長の告辞といたします。

道に迷った時はいつでも大学の門を叩いて下さい。

旭川医科大学はいつまでも皆さんのための母校です。

卒業おめでとう。

平成26年3月25日

旭川医科大学 学長 吉田 晃敏



医学科第36期生の卒業の日に

平成25年度医学科第6学年担当
呼吸器センター 教授 大崎 能伸

36期生の皆さん卒業おめでとう。今日は6年間の学生生活を振り返って、大いに仲間と盛り上がってください。楽しかった学生生活、苦しかった試験勉強、体がきつかった臨床実習、懸命に打ち込んだクラブ活動、仲間と昼に語った学生食堂、席取りが大変だった図書館での勉強、初めて親元を離れたアパート生活、明日からこれらのすべては君たちの掛け替えのない思い出になります。そして、明日からは医師としての新しい生活が始まります。

36期生は、多くの卒業生が旭川医科大学病院で初期臨床研修プログラムを選択してくれました。学年担当と同時に卒後臨床研修センター長としてとても嬉しく思うとともに、優秀な医師を目指す第一歩を大きく踏み出せるように心から願っています。また、道内の研修病院や、道外の研修病院を選んだ卒業生も自分の目指す道をまっすぐに進めるように願っています。

医師としての生活は、決して平坦な道の連続という訳ではありません。それは、医療は必ず人が介在する仕事であることも理由のひとつです。医師は人の訴えを聞き、その訴えの原因を究明し、内在する病気を診断し、それを治療することが仕事です。そのなかで、患者の訴えが理解できなかつたり、訴えの原因がみつからなかつたり、患者の信頼が得られなかつたりすることはしばしば経験されます。どんなに医学的な知識があっても、薬剤の名前を知っていても、新しい治療法に精通していても、うまく噛み合えないで自信がなくなることや、患者や家族とコミュニケーションがうまく行かないことなどを必ず経験します。そのような時には、一人で悩まないで先輩や仲間に相談することを必ず思い出してください。

医師としての自信を早く持ちたければ、得意な手技や診断法を身につけることです。多くの技術があるよりも、少なくとも確実な技術を身につけることが大切です。呼吸器診療であれば、胸部画像診断、気管支鏡、呼吸管理、吸入薬物療法、胸腔穿刺など

がそのような技術といえるでしょう。確実な技術を身につけていると、診療の場での余裕につながります。経験を重ねるうちに、そのような確実な技術を少しずつでも増やしていけば、医師としての自信が徐々に膨らんでいくと思います。

経験を積んでくると、医師としての自信が備わってきます。医学は「実践する科学」としての側面が非常に強い分野です。「科学的な考え方」とは、常に分析的で客観的な考え方です。症状を説明できる検査成績、診断の根拠を与える画像情報など、診断のプロセスに従って、客観的事実を積み重ねて治療方針を決めてゆきます。この考え方はとても大切なことではありますが、このような診療の経験を積んでくると、画像所見や検査所見などの客観的な情報がない場合に、症状のはっきりしない患者や、訴えを正確に表現できない患者を診ると重症の病気が原因ではないようにみえてしまうことがあります。皆さんはこの迷路に入り込まないように、病院には治療を求める人が来るということ、自分にしか見つけられない異常を持った患者がいるということも思い出したうえで、科学的な診療を心がけてください。

旭川医科大学で私たち医学部教員が皆さんと共通の時間を持てたのは偶然のことなのかもしれません。皆さんが医学部受験という難関をくぐり抜けて旭川医科大学に入学し、そこに私たちのような教育も担当する医師がいたということは、お互いの人生の中ではほんの僅かな変化があれば起こっていなかったことかもしれません。しかし、私たちも優秀な医師を目標として旭川医科大学に勤務していて、皆さんは良い医師を目指してここに入ったから時間が共有できたということも言えるでしょう。良い医師になることは、今日卒業する皆さんの今後の目標であるのと同時に、私たちの大きな目標でもあるのです。これからも、お互いの経験を共有しながら、目標に向かって勇気を持って前進しましょう。



看護学科第15期生の卒業にあたって

平成25年度看護学科第4学年担当
看護学講座 教授 望月吉勝

第15期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。大学での学生生活を振り返り、感慨無量のことと思います。皆さんが入学した時のガイダンスの中で、「私もあと4年で卒業（定年）です。一緒に卒業しましょう。」と言ったことが実現し、うれしく思います。

学年担当としては、稲葉佳江先生（現・札幌保健医療大学長）から引き継いでの2年間でしたが、授業科目は第1学年から幾つも担当してきました。思い出してみると、第1学年では「健康教育論」と「疫学・保健統計」、第2学年では「公衆衛生論」、第3学年では「看護研究」（研究の方法論）、第4学年では「卒業研究」（研究の実践）と、全部の学年で必修科目がありました。選択科目としては、第1学年の「科学論文の読み方・書き方」の分担と、第3学年の「看護学英語」（英語文献の読解）の分担がありました。こちらは選択した人がずいぶんと少なく、いずれも「研究」に関する大学らしい科目なのにと、残念に思っていました。

私が本学医学科公衆衛生学講座に着任したのは、医学科の第1期生が卒業する年の2月でした。当時のカリキュラムでは公衆衛生学は第4学年の科目でしたので、教育に携わったのは、医学科の第4期生からでした。公衆衛生学講座在任中は、若くして道立保健所の所長となった医学科の卒業生たちと公衆衛生に関するさまざまなテーマに取り組んだり、また道外の大学・研究施設の人たちと子どもの喫煙防止教育に関する共同研究に取り組んだり、そしてそれらの研究成果を国内学会、国際学会、学会誌で発表するという楽しい年月を過ごしました。そうした研究が縁で、イギリスのマンチェスター大学に文部省在外研究員として留学し、研究を更に進めることができました。

その後、図らずも、新設2年目の看護学科に着任し、看護学科の第1期生には、第2学年の「環境保健論」（皆さんのカリキュラムでの「疫学・保健統計」と「公衆衛生論」を併せたような内容）、第3学年の「看護研究」（研究の方法論）と「看護学特別講義」（英語文献の読解）、第4学年の「卒業研究」

（研究の実践）に携わりました。また、第1期生の卒業に間に合うように、大学院修士課程を立ち上げ、修士論文の指導と共通科目（保健統計特論）を担当して来ました。社会人院生の勤務の都合に合わせて、夜間にも、土曜日にも授業をしました。看護学科の卒業生が大学院に入学し修士の学位を取得し、そして看護学科の教員として戻って来てくれるようになりました。とてもうれしいです。

医学科の第1期生には間に合いませんでしたが、看護学科で第1期生から教育に携わり、第6期生と第15期生の学年担当を務め、そして第15期生の皆さんと一緒に卒業を迎えることは、教師冥利に尽きません。とてもうれしいです。

さて、これからの職場では、看護職としての力量とともに、研究や問題解決の力量が求められるでしょう。皆さんは大学での学びにより、それらの期待に応える土台は出来ているはずですが、もちろん、これからも研鑽を積んでいくことが必要ですから、勤務の合間をぬった限られた時間を有効に使うためにも、研究手法についての認識が大事です。質的手法と量的手法、そしてミクストメソッド（mixed method；質的手法と量的手法の両方を組み合わせる）と分類されています。質的手法は一見取っ付き易いように見えても、客観化し妥当性・信頼性を担保するには経験の積み重ねが不可欠です。量的手法は一見取っ付きにくそうですが、手順を覚えれば、思いのほか使えるものです。まずは量的手法、特に質問紙を用いた調査研究に取り組み、数量データに基づき、客観的に説明する経験をしてから、看護の現場で見つけた課題を質的手法で、更にはミクストメソッドで、解明を試み、そして職務に活かすことを願っています。

これから専門職として働いていく皆さんに、次の言葉を送ります。

“ARS LONGA, VITA BREVIS.” 学術は深奥にして、これを究むるには時間を要する。だから、倦まず弛まずコツコツと努力が肝要。

6年間で振り返って

医学科第36期卒業生 天野太史



東京大手町で会社員をしていた自分が本学に入学したのは29歳の頃でした。旭川の寒さに戸惑い、同年代の同級生が意外と多い事に驚き、自身の結婚式準備に追われながら慌ただしく2度目の学生生活を過ごす中で、気づけば学年クラス運営のまとめ役ポジションに立っていました。一回りほど離れた同級生達は大部分が高校を卒業したばかりのあどけなさが残る面々でしたが、一人一人と接してみると皆非常に個性が強く、私自身も非常に刺激を受けました。学年が上がるに従い、同級生達と親しくなると共にクラス全体の団結が強まって来た事を肌で感じ、本当に良い同期に恵まれたと感じました。この100名近くの仲間達が今後医師として北海道や日本の医療を支えていくと考えると、感慨を覚えると同時に本学が担っている医学教育の

重要性をしみじみと感じました。

自分自身を振り返ると2度目の大学生生活、かつ人の命を預かる仕事の為の勉強という意識の元（途中、息切れすることも時々ありましたが）積極的に授業や実習に参加し、色々と疑問をぶつけると、それ以上の熱量で教えて下さる本学の教員の先生方に触れ合う中で、旭川医科大学の熱さを感じることができました。クラス運営、医学学習と同程度に注力した英語学習では、正直、自分が入学当初に望んだ程の英語力がついたとは言い難い状態です。それでも自分一人では得られなかったであろう英語勉強の習慣をつける事ができたのは、CNN音読会のメンバーをはじめ、各種勉強会に協力して頂いた皆さんのお陰と感じています。

5年生の病院実習真っ只中と6年生の国家試験直前期に娘と息子がそれぞれ誕生し、なかなか慌ただしい国試受験勉強期間となりましたが、何とか医師になる事ができそうです。懸命に支えてくれた妻、自分のクラス運営や勉強会に付き合ってくれた同期生達、そしてこんな自分を受け入れ、医師になれるよう育てて下さった旭川医科大学関係者の皆様に心から感謝致します。

怒濤の6年間

医学科第36期卒業生 土田美結



今までこのような文の依頼を受ける事が殆ど無かったため、自分には無縁の事と思っていたので突然このような機会が訪れて非常に驚いています。

卒業に際して、という事ですが、未だに自分が卒業という実感が全くなく、入学から既に6年が経ったのだという事が信じられません。

思い返してみれば、私の6年間の殆どは部活動で占められていました。高校から続けていた弓道、そしてずっと興味があった合気道。

弓道部の方ではほぼ毎日道場に通り、試合の前は朝練をして授業に出て、部活をして……という日々を送っていた事もありました。中々結果は出ませんでした。現役最後の試合でやっと自分で満足出来る結果を出すことができ、心おきなく引退することが出来ました。

残念ながら合気道の方はあまり積極的に出席することは出来ませんでした。それでも道場に行った時にはいつも先輩後輩問わず皆さんがあたたかく迎えてくれたので、細々とですが続ける事ができ、一度だけですが演武を披露する機会に恵まれました。

私がここまで頑張れたのは、部活の先輩、後輩は勿論のこと、同期の存在が何よりも大きいと思います。部活の同期の支えがあったからこそ今まで部活を辞めることなく6年間来られたと切実に感じています。また、6年の夏ごろから学校のチュートリアル室で勉強をしている時も、同じ部屋で勉強している仲間と話すこと、そして学内で同期に会うことを通して「皆頑張っているんだから自分も頑張ろう」という気持ちになれました。

四月からは医師としての初期研修が始まります。今年は大学での研修を選択した人が多く、頼もしい同期に囲まれて研修が出来る事を嬉しく思います。学内、そして学外の日本各地に散る同期に恥じないよう、自分の行動に責任を持てるように日々意識していきたいと思っています。

最後になりますが、6年間応援、ご指導くださった皆様本当にありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第36期卒業生 更科 耕一郎



もう長い間、この大学に通っていたような気がします。決してあつという間ではありませんでした。それはきっと私にとってこの学生生活は、毎日が新しい発見のある、真新しい日々の連続だったからなのではないかと思います。

5年前の10月、私は編入同期10名で入学しました。入学式の当日から講義が始まり、間もなく解剖実習も始まりました。直前まで前の職場で勤務し、心の準備をする間もなく入学した私は、本当にやっていけるのだろうかと不安に思う毎日でした。しかし既に医学生として学んでいた同級生はとても頼もしく、学年としても非常にまとまりがあり、私は彼らにリードしてもらうことで先に進むことができました。

医学部の講義は、文部科学省が策定したガイドラ

インに沿って行われるため、基礎から臨床まで統一感のあるものでした。国家試験やその後の臨床を強く意識した内容で、重要な部分は複数の講義で何度も繰り返されるため、興味を持って、かつ効率よく学ぶことができました。また、講義の中には各講座の先生方が日々されている研究を垣間見ることができるものもあり、非常に興味深いものでした。

4年生からの臨床実習は、医療従事者として働くということがどういうことか、強く認識させられるものでした。実習の初日、私は指導医から急性腹症で搬送されてきた患者さんを診察するように言われました。痛みでのたうち回る患者さんを目の前にし、「これは性根を据えて頑張らなければ」と覚悟をした記憶があります。「白衣を着たらスタッフの一員。あとは何の境目もなく、進級、卒業して医者になり、その先もずっと続いていくんだよ」とその時の指導医に言われました。

4月から私は地元に近い釧路にて、医師としての第一歩を踏み出します。旭川医大を受験した時の思いや、初めて患者さんを目の前にした時の緊張感を忘れず、この先に続く医師としての道を全うできるよう、日々努力を続けていきたいと思っています。

卒業にあたって

看護学科第15期卒業生 伊藤 早木衣



4年前の春、大学生活の始まりを祝うかのような雪舞う旭川にやってきました。あつというまに時が過ぎ、今春、雪解けを待たずに学びの地である旭川を離れ、医療人として社会へ飛び立とうとしています。

思い起こせば1学年時、学習意欲が低く、飽き性な私にとって、毎日看護に関する講義を受けることは苦痛でした。日が暮れるまで技術を練習していた時もチュートリアル室にこもってテスト勉強をしていた時も、何のために頑張っているのだろうと嘆いていました。しかし、患者さんを受け持たせていただくようになり、対象者の人生の一部に関わると思うと身が引き締まり、積極的に学んでいかななくてはならないと思うようになりました。対象者のケアについて悩みこみ夜中まで記録を書くことや自分の無力さに涙が溢れることもありま

した。ですが、考えて考えて行ったケアが対象者の回復や笑顔に繋がると嬉しくなり、看護の魅力を感じられるようになりました。看護の楽しさが分かってきたからこそ、今後はこの学校での経験を糧にして、相手に関心を持って接し、個別性を重視してケアを行い、相手の健康と笑顔を引き出せるように精進していきたいです。

勉学のみならず、朝まで飲んでもくれたり、アルバイトに精を出したり、部活動で演奏したり踊ったりと思い起こすだけで笑顔がこぼれる素敵な出来事がたくさんありました。こんなにも思い出ができたのは、辛いことも楽しいこともすべてを共有してきた信頼のおける仲間がいたからです。出会えた仲間と過ごせた4年間は一生の宝です。「ありがとう」と何度言っても伝えきれないほどの感謝の気持ちに溢れています。

正直、自分は医療職に向いていないと思うことがあります。ですから、看護師として働くことに不安がありますし、就職後に看護から逃げたくなる日が来るかもしれません。ですが、この学校で得た経験に自信を持ち、今後も仲間と一緒に苦難を乗り越えていき、人のために社会で頑張っていきたいと思えます。

卒業にあたって

看護学科第15期卒業生 江口 由奈



「おおきくなったらなになりにたいですか?」との問いに「かんどふさんです」と拙い字で書いた幼稚園の卒園文集。幼い頃からの夢が叶うという期待と、漠然とした不安があったあの4月からもう4年も経つのだなと思うと、この

4年間にあった様々な出来事が思い出されます。

大学に入学し、幼い頃からの夢であった看護師に近づいたにも関わらず、看護を学び始めてから「看護」というものがわからなくなった1年生。自分の看護観を問われ、答えることができずにとて自信を失くしたことを覚えています。しかし学習を重ね、クラスメートと切磋琢磨し、実習で多くの患者さんと出会うことで、何が看護なのか、自分が大切にしていきたいものは何かを少しずつ見つけることができたのではないかと思います。今後も様々な人と出

会い、関わっていく中で自分の看護観を育てていきたいです。

この4年間は、私にとって社会勉強にもなった4年間でした。チーム医療が医療の基盤になっている現代において、周囲の人々と協力しあっていくことは必要不可欠です。大学は今まで私が過ごしてきた中で、考え方が異なる人々が最も多かったように思います。最初はそのことに戸惑いましたが、考え方が違う人の意見に耳を傾け、ディスカッションをして、より良い方法を見つけていくということは、自分の力を伸ばすことにつながったと感じます。

大学生活を送るにあたり、私は多くの人に支えていただきました。共に勉強し、泣いて笑って過ごしてきた友人、部活で出会った先輩・後輩、お世話になった先生方、実習でお会いしてきた患者さん、実家からの通学だったためにずっと甘えさせてもらった家族…。本当にたくさんの人の支えがあったからこそ、今の私があり、社会人として踏み出していくことができるのだと感じます。周囲への感謝の気持ちを忘れず、歩んでいきたいです。

卒業を迎えて

看護学科第15期卒業生 山田 亜理沙



旭川医大に入学してからの4年間を振り返ると、あっという間に時間が過ぎて行った印象があります。私が旭川医大に入学したきっかけは、看護師になりたいと思った理由に遡ります。病院という場所は、誰もが行ったことのある身近な場所であるにも関わらず、行くと緊張したり落ち着かなかったり、不安な場所でもあると思います。そんな場所で、訪れた人の不安を解消し、病院を少しでも安心する場所にできる、そんな看護師になりたいと思ったのがきっかけでした。旭川医大に合格した時は、とても嬉しかったことを今でも覚えています。大きな期待を胸に入学し、過ごした4年間。しかし現実には甘くはなく、講義や実技練習、試験、実習に追われる日々。と言いつつ部活動もかじっていたので、本当はもっと余裕があったのかもしれませんが、充実はしつつも、とても

忙しい大学生活でした。私は自分の思い描いていた理想の看護師、志した動機などすっかり忘れ、ただひたすら目の前のことをこなしていました。看護師になるってこんなに大変なんだ、看護師ってキラキラしてるだけじゃない、辛いこともいっぱいあるんだ、と強く感じ、本当の看護師というものを理解していきました。現実と向き合って嫌になることもたくさんありましたが、それでも卒業の日を迎えられたのは、両親や友人の大きな支えがあったことと、やはり看護師になりたいという思いが消えなかったからだと思います。私は在学中に、大好きな祖父を亡くしました。祖父は誰よりも私の大学入学を喜んでくれ、私の看護師姿を見ることを望んでいました。そんな祖父がいてくれたから、私は祖父を思い出すたびに自分の初心を思い出すことができ、祖父の死を経験したから、人を亡くす悲しみを知り、人の死を身近に感じるようになり、死と隣り合わせで働かなくてはならない病院という場所で、精一杯人と向き合いたいと思えるようになりました。入学する前に純粋に抱いていた看護師を目指した思い、必死に学んだ4年間、支えてくれた人達の思い、そのどれも大切にしていって、私は私の描く看護師になっていきたいと思っています。

忙しい大学生活でした。私は自分の思い描いていた理想の看護師、志した動機などすっかり忘れ、ただひたすら目の前のことをこなしていました。看護師になるってこんなに大変なんだ、看護師ってキラキラしてるだけじゃない、辛いこともいっぱいあるんだ、と強く感じ、本当の看護師というものを理解していきました。現実と向き合って嫌になることもたくさんありましたが、それでも卒業の日を迎えられたのは、両親や友人の大きな支えがあったことと、やはり看護師になりたいという思いが消えなかったからだだと思います。私は在学中に、大好きな祖父を亡くしました。祖父は誰よりも私の大学入学を喜んでくれ、私の看護師姿を見ることを望んでいました。そんな祖父がいてくれたから、私は祖父を思い出すたびに自分の初心を思い出すことができ、祖父の死を経験したから、人を亡くす悲しみを知り、人の死を身近に感じるようになり、死と隣り合わせで働かなくてはならない病院という場所で、精一杯人と向き合いたいと思えるようになりました。入学する前に純粋に抱いていた看護師を目指した思い、必死に学んだ4年間、支えてくれた人達の思い、そのどれも大切にしていって、私は私の描く看護師になっていきたいと思っています。

一年を振り返って

平成25年度 医学科第1学年

川原 健 司



見渡す限りの雪景色、凜とはりつめた空気の中、一年前、私が入学式の会場に向かっていたことが思い出されます。私が初めて北海道に来てからもう一年の時が過ぎようとしています。

入学当初、私は大学の勉強についていくことが出来るのか不安でした。しかし旭川医大の一年生の基礎科目を担当している各教室の教授、また先生方の講義は丁寧であり、質問や相談をした際にはとても親切に対応していただき、私をはじめ抱いていた不安は今では解消されました。一年生で学んだことは主に医学の基礎でしたが、二年生、高学年に進むにつれ、さらに多くのことを学ぶことができるので、これからが楽しみです。

また私は入学当初に大学での出会いに期待していました。大学に入学してみると、私が予想していた通り多くの人と話す機会があり、よき友人とめぐり

合え、よい人間関係ができたのではないかと考えています。

一年生のはじめに、病院や介護施設など様々な医療現場に実際に行くことができる早期体験実習があります。私は医療現場をよく知りたかったため病院での実習を希望しましたが、人数の関係で病院での実習ができなかったため、夏休みの期間を利用して地方の病院を見学しました。実際に医師の仕事を見学してみて、医師の責任の大きさや、医学生に求められる知識の量などを知り、私は医師という職業に深いやりがいを感じました。またこれから大学で学ぶ全てのことがいずれは社会に還元されると思われ、私は学生生活での勉学にさらに力を注いでいき、よき医師になろうと改めて決意することができました。

私にとってこの一年間は、自分のやりたいことをし、充実していましたが、一年間という期間は短く、できなかったことも多かったため、次の学年ではさらに充実した日々を送っていこうと思います。またこの一年間はとても人に支えられた年であったため、次の一年間は、人の助けになることを目標にして、日々頑張っていこうと思います。

一年を振り返って

平成25年度 医学科第1学年

菅 彩 花



まず一年の初め、入学式から綴らせていただきたいと思います。

入学式で驚いたことは、先輩方の猛烈な部活勧誘でした。その後何人もの先輩からお話を聞かせていただきましたが、皆さんそれぞれの充実した学校生活が伝わってきて、活気ある旭川医科大学を早々に実感することができました。結局部活は体力をつける為に運動系を中心にりましたが、数年ぶりの運動に体が悲鳴を上げたのは良い思い出です。やさしい先輩方と知り合えたことや、クラスや学科をこえて交流できたことも、部活に入って良かったと思える所の一つです。一方授業では早い時期から学ぶべきことが沢山あり、特に生物は毎授業いっぱいでしたが、それだけ新鮮で楽しみながら授業を受けていました。わからないときは友人と考え、学び合うのもとても面白かったです。ちなみに道外からの友人には、勉強以外にも色々と興味深い話を

教えてもらいました。また定期試験は量も多く、勉強の仕方も変わったので戸惑いましたが、友人と分からないところを解決し合い、それでもわからないところは先生方に質問させていただきました。私のしつこく回りくどい質問にも丁寧に答えてくださった先生方には、大変感謝しております。そして実習では何より、初めて書くレポートになかなか慣れずに苦労しました。今でも慣れたとは言いがたいですが、先生方から何度もお話を聴き、先輩のレポートを参考にさせていただき、友人と試行錯誤しながらレポートを書いた日々は、必ず自分の糧になっていると信じています。

この他にも学校生活では刺激を受けることが沢山ありました。特に研究にはもともと興味があったので、先輩の紹介ですぐに見学させていただきました。数回ほどしか参加出来ませんでした。たいへん貴重なことを沢山学ばせていただきました。今年ももっと積極的に関わりたいと思っています。その他にも臨床の先生とお食事会や、早期体験実習など語ることは尽きませんが、また今年もその上に新たな体験を積み重ねていきたいと思っています。

新天地で出会ったもの

平成25年度 医学科第1学年

白木 聡



去年の四月初頭、私は新生活に臨むべく、遙か東京から北の大地へと降り立った。空から旭川の街並みを見下ろし最初に驚いたことは、四月なのにまだ雪が残っていたことである。そして、雪が厚く積もった道の上を走るバス、あたかも雪の土手の間を縫うように伸びる歩道など、全てが驚きだった。

それから一年が過ぎた。この一年を一言で形容するならば、「出会い」であったと言えるだろう。個性豊かな友人たちに、頼りになる先輩の方々。そして深い知識と熱意を持った、尊敬に値する先生方。この一年間での出会いは、私の今後の人生に、既に大きな影響を与え始めていることだろう。

また、出会いは人に限ったことではない。北の大地が見せる四季折々の風景、あまり食べる機会の無かった料理たち、そして、新しく学ぶ学問分野についても、新たな出会いだった。

特に新たな学問との出会いは、最も衝撃的だったと言えよう。今までその片鱗にさえ、ほとんど触れることの無かった分野、心理学、統計学、医療概論、選択科目ほか、どの科目も私に新しい視点をもたらしてくれた。特に、今まで意識もしなかった出来事に対する、科学的なアプローチを見せてくれる学問分野。それは私の好奇心を刺激して已まなかった。

また、実習による、「実際に目で見る」という体験も、非常に感慨深いものであった。特に、生物学実習で解剖したチャイニーズハムスター。彼らを解剖する際、遺体をトレーに乗せようと手に取った時、彼らの体はまだ温かかった。あの時以来、私はたとえ実験動物であっても、彼らに対する感謝の念を忘れないようにすることを誓った。これもまた、出会いのもたらした変化と言えるだろう。

私の学生生活は、まだ始まったばかりである。今後、臨床実習が始まれば、未だ接点の無い臨床の教授や、患者の方々との出会いもあるだろう。そのときになっても、出会いを大切にできるようにありたいし、そう心がけていきたいと思う。

一年間を振り返って

平成25年度 看護学科第1学年

佐藤 光



この一年間は私にとって、初めての大学生活を経験した一年であり非常に中身の濃い充実したものになったと思う。去年の3月22日の後期合格発表を見てから慌ただしく時間が過ぎていった。序盤は流れに任せて周りについていくのに精一杯で、これが大学生なのか、と実感させられる日々だった。

そんな学生生活一年目を総括して特に印象に残っていること、それは部活動と基礎看護技術学という講義である。まず部活動に関しては、本当に多くの良き先輩方に恵まれたと思う。北医体といった大会など多くの遠征があり、道内だけでなく本州にも赴き盛岡や秋田などへ行く機会があった。そういった遠征や練習をこなしていく中で、先輩たちとの交流も深まりより一層部活動が楽しくなった。今の私にとって、部活動は大学生活の中で欠かせない一部と

いえる。

もう一つは、基礎看護技術学。通称、技術。看護学科1年生の間ではそう呼ばれている。この技術では実技などの演習、座学による講義など様々である。演習では先生の目を意識してしまうため緊張感がとてつもないし、演習についての課題やレポートは膨大に課された。それを間に合わせるために寝る時間を割いた日も多く、身体的にも精神的にも辛い時期があったがその反面充実感もあり、大学生なのだ実感できた。演習の際には予習をするのと、そうでないのでは理解度や技術習得に差があり、基礎看護技術学を通し予習をして講義に取り組むことの重要性を認識できた。

こうして振り返ってみると、この一年で体験したことはかけがえない財産になったように思える。一年過ごしてきたことの自信や経験を大学生活二年目にうまく生かし、入学してくる後輩のために旭医に関する知識を還元できればいいと思う。この一年を土台とし、今よりもさらに飛躍していきたい。

一年を振り返って

平成25年度 看護科第1学年
里村 真寿美



旭川医科大学に入学してから、生活環境や勉強内容、友人などすべてのことが新しく、挑戦と努力の連続であったように感じる。今回はその中で学んだことを大きく2つに分けて述べたい。

私はこの大学に入学して、初めて実家を離れて生活することとなった。最初のうちは親から離れて生活するということが自由に暮らせるということであり、楽しそうなどと軽く考えていて、一人暮らしに対してあまり不安はなかった。しかし実際は自分が思っていたような生活ではなかった。実家にいるときには疲れて帰ってきたら食事の準備などがされていたが、一人暮らしでそんなことはありえない。なにかも準備をするのは全て自分なのだ。疲れて帰ってきたうえに家事を行うというのはとても大きな負担であり、難しい。しかしよく考えると、親はそれをしていて。私以上に忙しく働いた後に食事やお

風呂の準備などをしていただいたのだ。しかも毎日である。私はこれを考えたときに親のすごさと、大きなありがたみを感じた。実家での生活は当たり前にあったものではなく、親のおかげで成り立っていたのだと知ることができた。

また、私にとって看護を学ぶということも初めてのことであった。大学入学前に私は、看護というのは病院で看病する仕事などと漠然と考えていたが、この大学で看護を学んでからそんな説明では足りない、もっと複雑で奥の深い仕事なのだということを知った。それと同時に、看護師になりたいという思いが大きくなったように感じる。まだ1年しか経験しておらず、この先の苦勞をまだ知らないが、今後この思いをなくさずに勉学に励んでいきたいと思っている。

これだけで振り返りきれそうな1年間ではなかったが、私のなかで特に大きかったのはこの2つに関してであった。これらの経験と学びを与えてくれた人たちに感謝したい。来年からは2年生になり、また新たな1年間を経験することになる。そのときには1年生のときよりも多くのことを学べるように感謝の気持ちと学ぶ姿勢というものを大切にしていきたい。

授業料未納による除籍について

授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成26年4月1日において授業料を2期以上滞納している場合、平成26年9月30日をもって除籍

となります。

以後授業料納期である6か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご注意ください。

学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成26年4月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、平成26年5月2日（金）までに「学生団体継続届」を学生支援課学生総務係に提出して下さい。

なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は平

成26年5月2日（金）に学生支援課学生総務係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

平成25年度 学位記授与式

平成25年度学位記授与式が、3月25日（火）10時30分から本学の体育館において挙行されました。

本学の室内合奏団の演奏がBGMで奏でられる中入場し、医学科98名、看護学科70名の計168名の卒業生の一人ひとりに学長から学位記が授与され、全員と握手をしてこれからの社会人としてのスタートに激励の言葉をかけられました。

引き続き、博士課程14名、論文博士4名、修士課

程13名にも同様に学位記が授与されました。

その後、会場を学生食堂に移し祝賀会が開催され、学長をはじめ、医学科・看護学科卒業生のそれぞれの学年担当教員や各同窓会長からの祝辞、在校生代表からの送辞が贈られ、卒業生の代表も謝辞として、大学生活を振り返り、また、新社会人としての抱負を披露していました。



◀ 医学科集合写真



◀ 看護学科集合写真

第2回 医学科白衣式

平成26年2月14日（金）旭川医科大学看護学科棟大講義室において、2月より臨床実習を開始する医学科第4学年を対象とした第2回医学科白衣式が挙行されました。

白衣式は「医師のプロフェッショナリズム」を意識させるものとして、1988年米国コロンビア大学で始められ、その後、全米各地に広がり、日本でも徐々に増加してきております。

本学では、平成24年度初めて挙行し、今回は第2回目となりました。

近年の医学の進歩は目覚ましく、それに伴って医学生が習得しなければならない知識は膨大になっていきました。その知識の習得に目が向き過ぎ、医のヒューマニズム、倫理観、利他主義、チーム医療、生涯にわたる自己研鑽の姿勢などが軽視されてきておりました。

そこで、医のヒューマニズムを改めてより深く理解する機会となるよう、また、白衣の授与を受けることで新たに再認識してもらえよう行いました。

式典では、まず、吉田晃敏学長から祝福と激励のメッセージを頂き、その後、学長をはじめとした8名の指導教授より学生一人ひとりに白衣を着せて頂きました。

この、一人ひとり白衣を着せて頂く時間の中で、まもなく始まる臨床実習に臨むにあたり、医師を目指した初志の「良き医師となること」を再認識して頂いたのではないかと思います。



また、自分たちがなる医療人としての目標を第4学年出席者全員で宣誓を行い、決意を新たに述べてもらいました。

自分の名前が刻まれた真新しい白衣を着た学生たちは、患者さんの信頼に応えられる医療人・患者さんへの思いやりと使命を持った医師を目指し、新たな一歩を踏み出しました。

【38期生誓いの言葉】

- 豊かな人間性を築き、医療に真摯に向き合います。
- 患者さんに寄り添い、信頼される医師になります。
- 多職種と連携し、科学的知見に基づいた最善の医療を提供します。
- 探究心をもって、医学の発展に貢献します。
- この志を忘れることなく、仲間と共に、日々研鑽に努めることをここに誓います。



各種保険について

○本学医学科学生が加入する保険の概要は、下記の図のとおりで①から③の3階建てとなっております。

③ 学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプ ※3階部分	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償&針刺し事故を補償
補償金額	死亡補償金 Aタイプ・Bタイプ 300万円 対人賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 対物賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 感染予防費用 保険期間中50万円
掛金	別表のとおり。
加入	医学科第1～4学年の4年間は任意加入ですが、臨床実習が4学年後期からあるために2年2月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に6年間加入をしてもかまいません。 ※学生教育研究災害傷害保険(学研災)及び医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)に加入していること。

② 医学生教育研究賠償責任保険(医学賠) ※2階部分	
内容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補償金額	対人賠償と対物賠償合わせて1事故につき1億円限度
掛金	6年間 3,000円 5年間(編入学生) 2,500円(1年間500円)
加入	入学時加入を義務付けている ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること

① 学生教育研究災害傷害保険(学研災) ※1階部分	
内容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合。 臨床実習中に接触感染症予防措置を受けた場合。
補償金額	死亡補償金 正課中 2,000万円 課外活動中 1,000万円 傷害補償金 正課中 治療日数1日から 通学中・学校施設等相互間の移動中 治療日数4日以上から 課外活動中 治療日数14日以上から 入院 1日 4,000円 接触感染予防保険金 臨床実習中 1事故につき 15,000円
掛金	6年間 4,800円 5年間(編入学生) 4,130円
加入	入学時加入を義務付けている

詳細については、学生支援課学生総務係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

- ①学生教育研究災害傷害保険(学研災)は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。
- ②医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。
- ③学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。
医学科第1～4学年の4年間は任意加入ですが、臨床実習が4学年後期からあるために2年2月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に6年間加入をしてもかまいません。

○保険金の種類と額

ご加入タイプ 保険金額・保険料		Aタイプ (自宅生用)	Bタイプ (下宿・寄宿生用)
保 險 金 額	①ケガ	死亡・後遺障害(注1) 300万円 入院・通院(注2) 治療費用実費	
	②病気	入院・通院(注2) 治療費用実費	
	③賠償責任(注3)	1事故1億円限度	
	④救援者費用等	300万円	
	⑤感染予防費用	50万円	
	⑥生活用動産(注4)	補償対象外	50万円
	⑦借家人賠償責任(注4)	補償対象外	300万円
必 ず 卒 業 予 定 年 次 ま で の 期 間 で ご 加 入 く だ さ い	保険料(一括払)	6年間分	58,590円 66,870円
		5年間分	52,090円 59,460円
		4年間分	42,330円 48,320円
		3年間分	32,570円 37,180円
		2年間分	22,780円 26,000円
		1年間分	13,020円 14,860円

(注1)教育研究活動中の事故は本保険では対象とならず、学研災での対象となります。

(注2)お支払い対象期間は通院または入院を開始した日からその日を含めて60日を経過した日の属する月の末日までとなります。

(注3)情報機器内のデータ損壊は1事故500万円限度となります。

(注4)一人暮らしの学生の方であっても自宅生用プラン(A)にご加入いただくことが可能です。

○平成26年に入学する本学看護学科学生が加入する保険の概要は、下図のとおりとなります。

(1) 看護学科学生Will 2保険(看護学科学生対象)

本保険は、正課中、学校行事中、課外活動中及び通学中における事故により、学生本人が身体に傷害を被ったとき、また、他人を負傷させたり、他人の物を壊したことによる法律上の損害賠償を補償し、実習中における感染予防措置費用等を補償する保険です。この保険は、加入を義務付けております。

① 看護学科学生Will 2保険	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償及び実習感染予防費用
補償金額	死亡補償金 173万円 対人賠償 1事故 1億円限度 入院保険金 4,000円 対物賠償 1事故 1億円限度 通院保険金 3,000円 感染予防費用 50万円限度
掛金	4,500円(1年間)
加入	本保険は、大学として加入を義務づけております。なお、契約期間が1年間のため本学では、入学時に4年間分また、編入学生は2年間分の保険料を入学時に徴収し、大学として契約手続きを行います。また、契約更新時も大学で手続きを行います。

インフォメーション

平成26年

- 6月6日(金) 大学祭「医大祭2014」(前夜祭)
7日(土) 大学祭「医大祭2014」
(一般公開 第1日目)
8日(日) 大学祭「医大祭2014」
(一般公開 第2日目)

教 員 の 異 動

H26.3.14	採 用	医学部外科学講座(循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野)	教 授	紙 谷 寛 之
H26.3.31	定年退職	医学部看護学講座	教 授	望 月 吉 勝
H26.3.31	定年退職	医学部法医学講座	准 教 授	間瀬田 千香暁
H26.3.31	定年退職	医学部物理学	准 教 授	安 濃 英 治
H26.3.31	辞 職	病院臨床検査・輸血部	准 教 授	紀 野 修 一
H26.3.31	辞 職	病院経営企画部	准 教 授	柴 山 純 一
H26.3.31	辞 職	病院第二外科	講 師	千 里 直 之
H26.3.31	辞 職	病院皮膚科	講 師	高 橋 英 俊
H26.3.31	辞 職	病院放射線科	講 師	山 田 有 則
H26.3.31	任期満了	病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科	講 師	國 部 勇
H26.4.1	昇 任	医学部外科学講座(循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野)	准 教 授	内 田 恒
H26.4.1	昇 任	医学部物理学	准 教 授	稲 垣 克 彦
H26.4.1	昇 任	病院放射線科	講 師	佐々木 智 章
H26.4.1	昇 任	病院緩和ケア診療部	講 師	阿 部 泰 之
H26.4.1	昇 任	〃	講 師	中 西 京 子
H26.4.1	昇 任	医学部消化管再生修復医学講座	特任教授	佐々木 勝 則
H26.4.1	昇 任	〃	特任講師	田 中 宏 樹
H26.4.1	採 用	医学部臨床検査医学講座	教 授	藤 井 聡
H26.4.1	採 用	教育センター	准 教 授	間 宮 敬 子
H26.4.1	採 用	脳機能医工学研究センター	准 教 授	千 葉 龍 介
H26.4.1	採 用	教育研究推進センター	准 教 授	竹 内 文 也
H26.4.1	採 用	医学部法医学講座	准 教 授	矢 島 大 介
H26.4.1	採 用	病院薬剤部	准 教 授	福 土 将 秀
H26.4.1	採 用	医学部小児科学講座	講 師	畠 山 直 樹
H26.4.1	採 用	医学部法医学講座	特任准教授	間瀬田 千香暁
H26.4.1	採 用	医学部外科学講座(消化器病態外科学分野)	特任講師	松 野 直 徒